R18-G
18歳未満の
閲覧・購入禁止
恵満
Illustration
ぽこにゃん
ビター・ブロッサム
BitterBlossom
～変身ヒロイン抹殺指令～

BitterBlossom

～変身ヒロイン抹殺指令～

恵 満

この物語は成人向けです。
１８歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語には出血や欠損・暴力・強姦などのグロテスクな表現があり、
それらに興味の無い方や嫌悪感・不快感を覚える方の閲覧はご遠慮下さい。

この物語によって生じる影響および
それらがもたらす結果については
執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。
また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり
犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではございません。

口絵・本文イラスト
ぽこにゃん

登場人物

七瀬凛々子（ななせりりこ）／スイートリップ

エリートの集う国際教導学園の国際科Ａクラスに通う美少女。成績トップでクラス委員も務める。
外交官となる夢を持つ傍ら、異世界ロアの女王であるクイーン・グロリアより力を授かった。
学園の平和を脅かす魔物と戦う「スイートナイツ」に変身する。

柚木香那葉（ゆずきかなは）／スイートキッス

国際教導学園の料理科Ａクラスに在籍する。両親を亡くしており、１つ年上の先輩である凛々子を姉のように慕っている。学園内のカフェではシェフを務めるほどの腕前。
スイートキッスに変身して戦うが、おとなしい性格が足を引っ張ることもしばしば。

月島魅麗（つきしまみれい）／ナヴァルニィ

学園を狙う悪の魔導シンジケート・ゼーロウに雇われた女性。魔法とは原理が異なる技を使い、スイートナイツたちを追い詰める。
普段は正体を隠して学園の教師を務めているが性格は残忍で真性のサディスト。その一方で科学技術や世界史に詳しく、美少女と安酒に目がない。

本ファイルは体験版です。
プロローグから第 1 章の終わりまでを
収録しております。

また、電子書籍版と
印刷版はレイアウトが異なります。

プロローグ

「んンっ……　はぁ……ァ♡」

じゅぶ、じゅぶと繰り返される湿った水音に押し殺した嬌声が混じる。静かな熱気に包まれた地下室で、衣服を剥ぎ取られた女は手首に枷を嵌められ自由を奪われていた。尻を持ち上げた四つん這いのポーズを強制され、屈辱で頬を赤らめながらも雌の本能に逆らえず喘ぐ。

キュッと引き締まった腰から尻にかけては肉付きがよく、年齢相応の豊満なボディは蠱惑的ですらある。

しかし、女の相手は人間の男ではなかった。

平べったいサンショウウオ頭の化物である。ヌルヌルした体表につぶらな瞳を持ち、四肢は人間に似て二足歩行していた。身体の大きさに比例して男性器も立派で、馬並みのサイズである。

「おっ♡　おっ♡　おぉ……　大き過ぎよっ……」

ひと突きされるごとに膣内が圧迫され、妊婦の如く腹が膨れる。普通の女であれば挿入した時点でショック死していることだろう。

だが、犯されているのは世辞にもか弱い存在とは言えない。

彼女の名はスイートルージュ。異世界ロアの女神近衛団直属の『スイートナイツ』に籍を置く魔法戦士である。

「あらあらぁ♡　おちんちん咥え込んで嬉しそうにしているわねぇ♡」
スイートルージュが声の主を睨み付けると、化物のストロークは一層激しくなった。みっともなく喘ぎながらも目の光だけは消さない。
健気な魔法戦士の痴態を心底愉快そうに見下ろしているのは、奇妙な格好の女である。
黒艶のボンデージ衣装は申し訳程度の面積で胸の先端と股間を隠し、身に付けたブーツにグローブにマントとあらゆるパーツが左右非対称のデザインをしていた。
腰まで伸びる銀髪ですら右と左でウェーブとストレートに分かれている。軍帽をかぶってはいるものの、おおよそ軍規とは縁遠い存在としか思えない。
ただし、女の顔のパーツだけは完全な左右対称だ。
切れ長の赤い瞳を携えており、その絶世の美貌は男であれば誰だって魅了される。
『ナヴァルニィ』
名前を呼ばれた軍帽の女は、恭しく頭を下げる。
声はスイートルージュと化物が繰り広げるセックスショウとは別の場所から聞こえた。
一人と一匹のまぐわう横には窓付きの巨大な窯が鎮座している。
その窓には厳しい顔の男が映し出されていた。
「これはこれは～　ご機嫌麗しゅうございますわぁ」
『見事な手際だった。地上に出てたった二日でスイートナイツのリーダーを捕らえるとはな』
「お褒めに預かり光栄ですぅ。迅速な仕事をモットーとしておりますので～」
『召喚器を使って呼び出せたのが悪魔ではなく魔力ゼロの人間だった時にはどうしたものかと頭

を抱えたが……　魔界の者よりもはるかに優れた働きっぷりだ』
「一日でも早く『ゼーロウ』のお役に立ちたいですし～」
『良い心掛けだな。地上作戦の前任者はスイートナイツに敗れているが、お前ならば任務を完遂できるだろう』
　窯の窓は異世界と通信している。
　男は魔道シンジケート『ゼーロウ』の大幹部で、ナヴァルニィの雇い主だった。
『ロアの覇権を握るには目障りな女神近衛団を倒さねばならん。そのためには魔界に棲む魔物を戦力として召喚し、支配し続けなければならない』
「勿論、心得ておりますわぁ♡　私自身には魔力はございません。ですがゼーロウを支えるだけのマナを、この地上世界で手に入れてご覧にみせます～」
『うむ。地上の人間は芳醇なマナ源となる。だが派手に攫(さら)ってしまっては、そちらの世界の軍事勢力と事構える事になりかねん。そうなれば我々は女神近衛団と地上世界を同時に相手にせねばならん』
「二面作戦を避けつつ、マナ源となる優秀な地上人を集める……　このナヴァルニィの手にかかれば容易いことですわぁ♡」
　これは資源争奪戦なのだ。その作戦指揮をとるべくここにいる。
　自分にそう言い聞かせたナヴァルニィは柔和な笑みを作る。
　大幹部の男は満足したのか「期待しているぞ」と告げて通信を切った。
「はぁ……　心配だからっていちいち連絡してこないで欲しいわねぇ」

ブーツで召喚器を蹴飛ばすと軽い金属音が響いた。
窯を忌々しそうに見つめているといつの間にかスイートルージュは絶頂に近づいている。
「イクぅッ♡　極太の化物チンポでイっちゃうぅぅっ〜」
ドビュ、ドビュ、ドビュ……
男根からひり出される精子の音がナヴァルニィの耳に届いた。
横目を遣ると、陰陽の結合部からは滝のように白濁液が流れ出ている。
「楽しそうでいいわねぇ。好きでもない相手に犯されてイっちゃうんだものぉ」
頭を床に伏せ、尻を突き出したスイートルージュに侮蔑の視線を向ける。
女神近衛団は清純な女性のみで構成されるらしいが、果たして目の前の雌豚は職務復帰できるのだろうか？
要らない心配をしつつ、サンショウウオ頭の化物に下がらせる。
ペニスを引き抜かれてセックスの余韻に浸るスイートルージュは無様なポーズのまま荒い呼吸を繰り返した。
「そろそろ他のスイートナイツについても教えてくれないかしらぁ？　あなた以外にもいるんでしょ〜？」
「はぁ……　はぁ……　な、仲間を売ったりしないわ」
「さっきまで魔物のチンポ咥え込んでヒィヒィ喘いでいた女の台詞じゃないわねぇ。あなたのオマンコ、だらしなく開いたままよぉ？」
「くっ……　言わないで……」

精液溜まりの上で崩れるスイートルージュがあまりにシュールで、笑いを通り越して呆れてしまう。
魔法戦士は強い魔力と意志を兼ね備えた非常に厄介な存在だ。敗北しようが何度でも立ち向かってくるらしい。
だが清純な乙女でもある彼女たちは、陵辱と快楽を与えて性奴隷に堕とすことで戦力としても取り込める。
貪欲に戦力を欲するゼーロウにとっては敵でもあり資源でもあるのだ。
（ま、オナニーしたこともないまま高潔な目的と力を与えられたらねぇ？　ちょっとのセックスだけで男に股開くようになるのはいただけないけど～）
このままスイートルージュを調教していけば味方につけることも可能かもしれない。
だがそれはナヴァルニィの性分に致命的なまでに合わなかった。
（この女を倒すのに『律（ルール）』の異なるこの世界で力を使いすぎちゃったわぁ……　おかげでマテリアルのストックも残り少ないし～）
ゼーロウの大幹部からは見事な手際だと称賛されているものの、実際のところスイートルージュ相手には辛勝である。
様々な要因が折り重なってナヴァルニィは全力から程遠い実力しか発揮できない。
加えて魔力や魔法といった、ナヴァルニィにとっては未知の技術体系は敵に回すと予測が立てにくかった。
不慮の事態に陥る可能性も考慮しつつ作戦を立てる必要がある。

これから他のスイートナイツを相手にしつつ、自分の計画を推し進めるのだから骨が折れるだろう。
ともあれ、第一歩として相手の情報は把握しておかねばならなかった。
「あなた、自分が傷ついたり辱められたりするのはいくらでも耐えられるみたいねぇ。感心するわぁ」
「魔法戦士たるもの、このくらいの責め苦では負けたりしないわ」
「じゃあ、こういうのはどうかしらぁ？」
ナヴァルニィが指を鳴らすと、制服姿の女の子たちが魔物に連れて部屋に入ってくる。全員が怯えて今にも泣き出しそうだ。
精液まみれでボロボロのスイートルージュの姿を目の当たりにした際は、大げさな悲鳴まで上げている。
「生徒には手を出さないで！　私はどうなっても構わないから……」
「そういえばあなた教師だったわねぇ♡　身を挺して教え子を守ろうなんて泣けてくるわぁ。で・も・ね～」
「ひっ……　な、何をするつもりなんですか？」
一番手前にいた女子生徒が怯えているのも構わず、ナヴァルニィは後ろに回って両肩を掴んで押す。
窯は窓の部分が明滅し、不快な駆動音を奏でている。
「召喚器がエネルギー切れなのよぉ。マナを補充してあげないと、新しい魔物を呼べないのよねぇ」

「まさか……」
「薪になってもらうわぁ♡」
背後から突き飛ばした女子生徒がよろめいて、窯の方へと倒れ込む。
その瞬間、窯の前で魔法陣が展開して女子生徒の身体を覆った。みるみるうちに肉体が溶けて虹色のモヤへと変わる。
「い、いやぁあああっ!? 身体がっ!? 私の身体がぁ!? 助けテ!! タスケテェ!!」
断末魔は長く続かず、悲鳴は奇妙なトーンに変わって消えていく。
残された女子生徒たちは声を失って固まっていた。
「あ、あ、あ……」
「すっご〜い♡ ホントに肉体が溶けちゃうのねぇ♡」
人間のマナ化。
その悍ましいプロセスを前にナヴァルニィは目を輝かせ、対照的にスイートルージュは絶望のドン底に突き落とされる。
虹色のモヤは窯へと吸収され、後には女子生徒の制服だけが床に残された。
「ふむふむ。この世界の計測器で魔力そのものを観測するのは難しいけど、物理的な痕跡であればトレースできそうねぇ。サーモグラフィにはちゃんと温度変化のログが取れているわぁ。問題はどうやって魔力起因かを判断するかだけど――まぁ、解析アルゴリズムを組んでなんとかしましょう♡」
窯の近くに置いてあったノートパソコンを拾い上げ、ナヴァルニィはデータとにらめっこして

いる。
先程、マナと化して消えた少女に対しては何ら感慨は抱いていないようだ。
むしろ実験がうまくいって喜んでいるようにしか見えない。
「ナヴァルニィっ!!」
「あっははは！　いい顔よぉ、スイートルージュ♡　ヨガっている時よりもずっといいわぁ♡
正義の変身ヒロインはそうでなくちゃね～」
立ち上がって掴みかかろうとするも、極太の男根を咥え込んでいたせいで腰が立たない。
惨めに倒れ込んだスイートルージュの頭をナヴァルニィのヒールが踏み付ける。
「さ・て。あと何人か女の子いるけど、薪を焚べるのは気が引けるわぁ。私はかわいいコが大好きなのぉ♡」
「許さない！　絶対に、許さないわ！」
「もう一度だけ言うわぁ。他のスイートナイツの正体を教えてちょうだい～　でないと、どうなるか分かるわよねぇ？」
「……」
逆らう力は残されていない。
スイートルージュは冷静に判断を下す。
ゆっくりと仲間の名を告げると、ナヴァルニィは魔物に命じて女子生徒たちを下がらせる。
恐怖のあまり腰が抜けてしまった彼女らはズルズルと引きずられていった。
「ありがと♡　あなたがお仲間の情報をお漏らししてくれたおかげで作戦が捗るわぁ♡」

「あの子たちは、お前になんか負けない」
「おぉ、こわいこわい……　肝に銘じておくわね♡」

第一章

1

遠くに背の高い電波塔が見えた。この街をスマートシティ足らしめている通信施設であり、シンボルでもある。

スーツ姿のナヴァルニィは入念に周囲を確認し、頭にインプットした地図と現実の景色を紐付けていく。

ここは国際教導学園。各地から集められたエリートが集う超巨大学園都市である。住居エリアと学園エリアをバスやモノレールなどの交通インフラで繋いだこの街は、教育を目的としながらも生活に必要な機能を全て内蔵していた。

朝の時間帯は特に賑やかで、前途有望な大勢の若者が波となって移動する。

この中にとびきり邪悪な存在が息を潜めていたところで気付くものなんていない。しかも、その者が飛び抜けて麗しい容姿だったら警戒する道理もないだろう。

バスに乗り合わせた学生から「なぁ、あの綺麗な人って誰だ？」「銀色の髪に赤い瞳……どこの国の人だろ？」「新しい先生かな？」「海外の人だよな。背高ぇ……」「もしかして国際科の講師とか？」なんて声が聞こえてくる。

ナヴァルニィはその度に笑顔を作って返しておいた。

（潜入は順調ねぇ～）
凝りに凝ってあつらえた左右非対称のボンデージ調のコスチュームはさすがに着ていない。身体の髄まで腐れた悪党とはいえ、ナヴァルニィはＴＰＯを弁えている。
その気になれば質量転送装置（トランスファ）を使って一瞬で着替えられるのだが、通学中の青少年たちには少々刺激が強過ぎるだろう。
（そしてここが七瀬凛々子が在籍している国際科……）
バスを降りて少し歩き、目的の学舎に着く。この学科だけで生徒は千人規模だ。ちょっとした学校なら、この建物ひとつで全学年の授業ができるだろう。
もちろん、国際教導学園は国際科以外に多数の学科がある。
生徒たちはナヴァルニィを遠巻きに見ながら建物の中へ入っていく。
（私の教員部屋はどこかしらぁ？）
教員として潜入するための偽装工作は済んでいる。
ナヴァルニィは新任教師・月島魅麗（つきしまみれい）として、ここに来たのだ。
職員ひとりひとりに部屋が１個ずつ割り当てられているのだが、見取り図に月島という苗字は見当たらない。
（まさか偽装工作に気付かれたかしらぁ？）
それはそれで面倒だ。
どうしたものかと思案していると「あの……」と背後から声をかけられる。
振り返ると茶色の髪をレース付きのリボンで結えた少女がいた。身体付きは華奢だが凛とした

佇まいが好印象で、学園の制服がよく似合っている。
（あらぁ？　今朝見た中で一番レベルの高い美少女じゃな〜い？）
　湧き出る邪心を抑え、少女の意図を察したナヴァルニィは困り顔を作った。
「何か、お困りですか？」
「えぇ、私の教員部屋が見つからなくて」
「もしかして、あなたが新任の月島先生ですか？」
　自分の偽名のことが頭から抜けていて、一瞬だけ反応が遅れた。ナヴァルニィはすかさず「そうよ」と返しておく。
「やっぱり！　私、七瀬凛々子（ななせりりこ）といいます。月島先生が担当する国際科Ａクラスで学級委員をやってます」
「あなたは私の教え子になる生徒？」
「はい！」
　七瀬凛々子。その名を心の中で反芻したナヴァルニィは笑いそうになるのを堪えた。
　なんという偶然だろう。まさか初日のこんな場所で出会うなんて。
（この娘がスイートリップ。ゼーロウの地上侵攻を退けてきた戦士には見えないわねぇ）
　あまりに線が細い。それに愛らしい。
　おおよそ戦いとは無縁に見える。
「まだ案内板のデータが更新されていませんね。でも私、月島先生の教員部屋を知っています」
　凛々子は月島魅麗の部屋まで案内してくれた。

なるほど、実際の扉には『月島』と表札がかかっている。
受け取り済みのカードキーを通して中に入ると、がらんどうの部屋にダンボールが積み上がっている。怪しまれぬように荷物として送っておいたものだ。
（ちょっとした事務所にできそうねぇ。応接用のテーブルにデスク、本棚、奥には給湯室まであるわぁ）
さすがにエリート養成校だけのことはある。
これが個々の教員に割り当てられているのだから破格の待遇だ。
「ありがとう、七瀬さん。助かったわ」
「いえ。困っている人に手を差し伸べるのは当然のことですから」
僅かにナヴァルニィの頬が引き攣った。
助けて当たり前という態度が気に食わない。しかし、露骨に表へ出すほど稚拙ではなかった。
代わりに当て擦ることを選ぶ。
「あなたのような生徒がいて助かったわ。ここはとてもいい学園ね。街も平和で学ぶには最高の環境だもの」
「……それは」
平和という言葉に凛々子は反応を見せた。狙い通りだと心の中で口元を緩める。
この少女が密かに悪の組織と戦うスイートナイツである以上、街の平和が脅かされていることを知らないはずがない。
「最近、噂になっているんです」

「噂？」
「はい。夜の街に魔物が出て、学園の生徒を連れ去ろうとしている……って」
ナヴァルニィは「どう返せばいいのか分からない」と言わんばかりの戸惑いの表情で黙り込む。その企てをしている本人なのだから全てを知っているのだが。
「あ、でも心配しないで下さい。人知れず正義の味方が現れて魔物を退治してくれるんですよ！」
「その話、本当なの？」
「あくまで噂ですけどね」
「ちゃんと調べなきゃいけないわ。私、前任の沙倉先生から綱紀局の委員も引き継いでいるのよ」
また凛々子の顔が曇った。これもナヴァルニィの狙い通りである。
沙倉愛梨（さくらあいり）ことスイートルージュは今、ナヴァルニィの手に落ちていた。学園側は生徒の動揺を嫌って行方不明とは発表せず、表向きは急な海外研修ということになっている。
スイートナイツはリーダー格のルージュを失ってなお奮戦しているのだ。
「そうですね、愛梨先生ならそうすると思います」
顔を伏せた凛々子の態度からも動揺が窺える。やはり年長者を欠いたのはスイートナイツにとっても痛手だったようだ。
（残り少ない力を吐き出してでも倒した甲斐があったみたいねぇ。おかげで力任せに叩き潰すような戦い方はできなくなっちゃったけど……）
あまり虐めても意味はない。
この辺りで飴を差し出しておく。

「悩みがあるなら私に相談してね」
「え？」
「変な噂があると学業に集中できないでしょ？　こう見えてもスクールカウンセラーの資格も持っているの。七瀬さん、ちょっと元気ないというか……」
「い、いえ。大丈夫です！　授業もありますから、失礼します！」
「そう？　じゃあ、教室で会いましょう」
そそくさと退散していく凛々子の背を見送り、心からの笑みが溢れる。
これからどう料理していこうか、と。

2

夜の帳が下りても街は眠らない。地上からのうるさい灯りに照らされ、月がさめざめと泣いている。
その悲哀を背に、電波塔の天辺では新月（ナヴァルニィ）の名を冠する女が銀の髪と歪なマントを靡かせていた。
血に染まったかのような真紅の瞳で人間の営みを睥睨し、胸の先端と腰回りを辛うじて隠す程度の黒艶衣装を指先でねっとりと愛撫する。
「ショウ・タイム☆」
ナヴァルニィの合図と共に、商業エリアの北から悲鳴が上がる。

グローブを嵌めた右手の人差し指と親指で輪を作り、その中を覗き込むと景色が拡大された。公園の照明の下で蠢く魔物たちが無辜の人々に襲いかかっている。

「さぁ、餌に食いついて出てきなさいスイートナイツ♡」

視線を公園の入り口の方へ移す。

短いスカートを跳ね上げながら可憐に駆ける乙女の姿を認めた。舐めずりをして電波塔から飛び降りる。次々と背の高い建物から建物へジャンプしながらも少女からフォーカスを外さない。

七瀬凛々子はこちらの視線に気付いたのか、一瞬だけ厳しい視線を向けてきた。

(私を無視して、まずは市民を襲っている下魔から始末するつもりねぇ♡)

胸が高鳴る。

あの清純な乙女が勇ましい戦士へと変わる瞬間だ。

できるだけ近い建物の屋上に着地し、じっくりとその姿を捉える。

「スイート・マジカル・センセーション!!」

高らかに声と共に、魔法が凛々子を裸にする。

爆ぜた制服の代わりに光が彼女を覆い隠し、次に姿を現したときには全く別の衣装へと変わっていた。

「あれが魔法戦士スイートリップ……」

黒基調の凛としたコスチュームは学生服を連想させるデザインで、引き締まったヘソ周りとしなやかな太ももを露わにしていた。スカートは短く、オーバーニーソックスに包まれた脚がすらりと伸びる。足元は黒いヒールだった。

胸元の紅いリボンと各所に散りばめられた金色の装飾が黒基調の衣装にアクセントを加えている。栗色の髪にはレース状のアクセサリーがあしらわれていた。
「美しい……　完璧な変身ヒロインじゃないかしらぁ？」
思わず本音がこぼれた。
うっとりと眺めているとスイートリップは手にした武器を構えて名乗りを上げる。
「愛と正義の魔法戦士、スイートリップ！　この学園を汚す魔物！　クイーン・グロリアの微笑みに誓って、この私が許さないっ！」
「ゲゲっ!!」
下魔は人語を解する知性など持ち合わせていない。しかし本能で危険な相手だと察知したようだ。
先手を取るべく次々とスイートリップに襲い掛かる。
スイートリップは全く動じていない。深く息を吸い、三日月をあしらった棒状の得物を振るった。
「クレッセント・ハーケン!!」
地上で斬月が輝くと、二足歩行の爬虫類みたいな姿の下魔は断末魔だけ残して消散してしまう。その際、血も肉も爆ぜていない。
見た目からは打撃と斬撃を合わせた攻撃をするものと予想していた。
「殺していない……　魔法戦士の例に漏れず浄化して魔界へ送還しているってワケねぇ」
観察に徹したナヴァルニィは呆れ顔になる。

そんな表情の変化など存ぜぬスイートリップは続けてグローブに覆われた手を掲げた。すると指先に魔法陣が現れる。
逃げ出そうとする下魔の背に向かって……
「エンシェント・ファイヤー!!」
「グゲゲェっ!?」
吹き荒れる炎が下魔を呑み込む。
やはり焼死体は残らず、跡形もなく消えていた。
間違いない。ダメージの蓄積で魔界へ追い返している。
「華奢に見えても魔術師と戦士の技術に騎士サマの精神を併せ持つ……ってわけねぇ♡」
ロアなる異世界の女神近衛団とやらがエンジェルナイツやらアップルナイツやら名乗っている理由には合点がいっている。とにかく高潔を地で行く連中だ。
もしもナヴァルニィがスイートリップと同じ立場だったら……
「殺しちゃえばいいのに面倒なことするわねぇ」
相手は異形の化物なのに、どうして気遣う？
魔法戦士の美しい姿には心惹かれる。
なのにその精神性ときたら最悪だ。魔物相手に手加減する子供じみた発想には敵愾心すら湧いてくる。
「視線にはとっくに気づいているわ！　隠れてないで出てきなさい！」
けしかけた下魔は全て倒され、見通しの良い噴水前に陣取ったスイートリップは大きな声を上

月を背にマントを靡かせ、ナヴァルニィは顔を引き締める。
互いの目が合うとスイートリップは意外だと言わんばかりの顔をした。
「あなたは……？」
「お初にお目にかかるわぁ、リップちゃん♡　私はナヴァルニィ。この学園都市の攻略を任された魔導シンジケート『ゼーロウ』の幹部よぉ♡」
本当は外部から雇われているだけで、幹部の席も「功績を上げれば用意する」程度の話でしかない。
しかし、そんな敵組織の内情などスイートリップは知らないだろう。ちょっとでも脅威だと思わせておいた方が退屈しないで済むと判断した。
「変な格好をしているけど、あなたも人間でしょう？　どうして魔物を使って人々を襲うんですか？」
渾身の左右非対称デザインのコスチュームを「変な格好」とぶった斬られてしまい、ナヴァルニィは苦笑を漏らす。
「人の皮を被った悪魔かもしれないわよぉ♡」
「あなたからは魔力を全く感じ取れない。魔物じゃないし、強いようにも見えない。本当に幹部なの？」
痛いところを突かれた。
余裕を崩していないが内心は「嫌な女だ」と毒を吐きたい気持ちでいっぱいである。
「あなたたちとは異なる『律（ルール）』に身を置いているの。だから魔力ゼロなのよぉ。でも、弱いと思

うならどうして攻撃してこないのかしらぁ？」
「言葉が通じるなら話し合いができると思ったの」
なるほど、国際科に籍を置く優等生らしい解答だ。
青臭くて場違いで反吐が出そうだ。
「否（ニェット）。断言しちゃうけど、私とは交渉できない前提で考えてねぇ♡　欲しいのはスイートナイツの首♡」
長い舌を出して醜悪に笑って見せたナヴァルニィは自分の首筋をなぞるジェスチャを披露する。一抹の期待を抱いていたスイートリップは静かに目を伏せ、すぐに見開いてから得物を構え直した。
「私には学園の愛と平和を守る使命があります。それを乱すものを許すわけにはいきません」
「与えられた力をみんなのために使う――絵に描いたような正義の味方ってわけねぇ♡　ホント、相容れなくて残念♡　さっさと始めましょうかぁ」
「言われなくても！　やあっ!!」
高低差を物ともせず踏み込んできたスイートリップはクレッセント・ハーケンから突きを繰り出してくる。
バックステップで建物から飛び降りたナヴァルニィは相手が追ってくるのを確認し、ほくそ笑む。
地上に降りても攻撃は終わらずスイートリップのターンが続く。さらなる踏み込みと薙ぎ払いで襲いかかってくる。

夜の公園には重い風切り音が響いた。
（なかなか鋭い攻撃ねぇ。一発もらっても面白そうだけどぉ～）
回避に専念し、ひたすら避ける。マントや髪を何度も重い一撃がかすめていくが焦りはしない。
白状した通り魔力を持たないし、実際に魔法とは違う『律（ルール）』の元で存在している。その差異こそ最大の武器だ。
イメージはブービートラップ。そう決めてマントの下で小さく指を動かしてコマンドを組む。
（そっちが魔法なら、こっちは科学♡）
ナヴァルニィの胎内には質量転送（トランスファ）装置というデバイスが組み込まれている。この装置で異次元の質量を呼び出し、構築するのだ。この技は魔力の流れを全く伴わないため、スイートリップには感知できない。
そう踏んで足元に障害物を設置した。躓いて惨めにコケる姿を想像していたが、予想はあっさり外れる。
スイートリップは一瞥することなく、突進の勢いを緩めずに輪っか状のブービートラップを避けてしまった。
正義に燃える瞳からは「お見通しよ！」とでも言わんばかりの圧がかかる。
（私の視線の先まで確認しているのねぇ。予想していたよりもずっと『戦士』だわぁ。濡れちゃいそう♡）
間髪入れず次なるコマンドを組んで相手の鼻先にマテリアルの『槍』を構築して発射し、綺麗な顔に風穴を開けんとする。あれだけの勢いであれば自ら突っ込んで致命傷を負う。

が、スイートリップは身体を回転させながら『槍』を回避した。これにはさすがのナヴァルニィも感嘆する。

（予備動作まで見抜かれているわねぇ♡　魔法を使うだけあって、何もない空間に物質が現れても驚きもしないわぁ。質量転送装置（トランスファ）に制限がかかったこの世界じゃ、まともに相手するのは厳しいかしらぁ）

おめおめと姿を晒した手前、少しは良いところを見せてやりたい。

このまま避け続けてジリ貧になるのは悪虐の使徒としてなんともカッコ悪いではないか。

内に秘めた美学が反撃せよと訴えてくる。そうして逃げ回っているうちに園内の噴水に踏み入ってしまう。

お気に入りのブーツに水が入り、マントの裾が濡れてしまった。内股に滴る透明な雫を誤魔化せるのだけはプラスかもしれない。

テンションが駄々下がりしたところでスイートリップは武器を持たぬ左手をこちらに向けて掲げる。

（魔法？　さっきの炎のやつ？）

逃げる下魔を倒すにはおあつらえ向きだろうが、あんな直線的な攻撃をまともに食らうほど間抜けじゃない。

魔法陣が現れ、輝きを放ちながら回転した。そこへ凛とした声で呪文が放たれる。

「クルセイダー・ライトニング!!」

足元の水に紫電が走り、空気が爆ぜる。

到達まで瞬きする時間すらなかった。
「しまっ……　ひぎいいいィっ♡」
回避できなかったナヴァルニィは全身を痙攣ながら惨めな悲鳴を上げ、軽く絶頂してしまった。
骨と肉が分離する錯覚と共に激痛が走り、意識が一瞬だけ彼方へと飛ぶ。
目の焦点をどうにか合わせて天を仰ぐと寂しい月が見えた。鼻腔を焦げた臭いが満たし、どうにか正気を繋ぎ止めてダウンを拒否する。
「水辺に追い込んで電撃の魔法を……ねぇ？　えげつないわぁ♡」
クレッセント・ハーケンの大振りな攻撃はワザとだ。
こちらを下がらせつつ、地の利と魔法を活かせる場所まで追い込むための。
「降参してください」
視線を落とすと油断なく構えたスイートリップがいた。まだ魔法陣が消えていない。
すぐにでも次の電撃を放てるだろう。
気管が焦げたせいで口から煙が出る。焼けた喉で喋るのが億劫だった。
（まったく……　明日も授業があるのに）
赴任二日目で休むとさすがに怪しまれるだろう。よりにもよって七瀬凛々子の担任なのだから意地でも怪我を回復させて授業をしなければならない。
「覚えてなさい……　次はこうはいかないわよぉ……」
これもまた、言ってみたかった台詞だ。悪党たるもの、負け惜しみを吐き捨ててから逃げなければならない。

「逃がさない！」
二度の直撃は避けなければならない。
ナヴァルニィは自らの足元に暴力的なコマンドを送る。一瞬のうちに地面から黒い柱が生えて、その勢いで跳ね飛ばされるように身体が宙を舞った。一瞬遅れてスイートリップの電撃が走るも、捉えるには至らない。
空中で体勢を身体を立て直し、給水塔の上に着地して正義のヒロインを見下ろした。
「また会いましょう〜♡」
「あっ……　待ちなさい、ナヴァルニィ!!」
呼び止めに応じてやるほどの余裕はない。
ナヴァルニィは次々と空中に黒いブロックの足場を生成し、夜の空へと消えた。

3

すっかり日が暮れてしまった。
国際教導学園の寮は門限に厳しく、遅れれば罰則を受ける。
バスに飛び乗れば時間ギリギリで居住エリアに戻れると踏んでいた女子生徒は、ショートカットのために通った公園で怪物たちに遭遇した。
悍ましい二足歩行の爬虫類どもに追いかけ回された挙句、茂みに逃げ込んでやり過ごそうとし

たが見つかり、絶体絶命のピンチに陥る。
そのとき。光の如き速さで現れ、怪物を一閃して去っていった者がいた。
あまりに一瞬のことで何が何だか分からなかったものの、女子生徒はある確信を抱く。
（あれが……　噂の正義の味方なんだ！）
もう門限なんて頭になかった。
近くで雷の落ちる音がして身構えたが、気付けば怪物たちの姿は見当たらなくなっている。きっと退治してくれたのだろう。
お礼がしたくて探し回ってはみたものの、正義の味方らしき人物は見当たらなかった。それどころか怪物騒ぎのせいで人っ子ひとり見当たらない。
「うっ……」
急に心細くなって身体の中からスーッと熱が引いていく。こんなことしている場合じゃない、さっさと帰らないと。「魔物に襲われて隠れていた」なんて信じてもらえそうにない説明をしなくちゃいけない。
少女が肩を落として公園の出口に向かう途中、トイレの前を通りかかる。
そのとき不意に背後で人の気配がした。振り返ろうとしたそのとき……
「きゃっ……!?」
何者かに羽交締めにされ、口を塞がれる。パニックになって手足をバタつかせたが抵抗虚しく男子トイレの中へと引き摺り込まれた。そのままうつ伏せに倒されて、背中の上に乗っかられてしまう。

男子トイレの床と頬が触れ、不衛生さのあまり激しい吐き気を催した。周囲にはこれまで嗅いだこともないようなひどい臭いが立ち込めている。
「すげぇ！　ちゃんと釣れたなぁ！」
建物の中にはサングラスで目元を隠した男がひとり。自分の背に乗っている奴と合わせれば二人いる。
何がおかしいのか、サングラス男は手を叩いてケタケタと笑っている。
「その制服、国際教導学園の生徒だろ？　金持ってそうだよなぁ、おい」
サングラス男が屈んで勝手に少女のバッグを漁った。
財布の中から現金が引き抜き、生徒カードを物珍しそうに見て目を細める。
「国際科ねぇ……　なに勉強してんだぁ？　国旗とか見てどのクニか当てんのか？　遠足は海外だろ？」
ニヤケ笑いと共に男は財布を便器の中に捨てた。
その瞬間、少女の中で恐怖を飛び越えた怒りが爆発し、あらん限りの力で身体を捻る。財布は学園に入った時にもらった大切なプレゼントだった。
持ち上げた頭はサングラス男の顎を直撃し、間抜けな声を上げさせる。
してやったりと思った矢先、背中にかかる圧力が倍増しになって肺が潰れた。呼吸がうまくできず少女は喘ぐ。
「かはっ……」
「調子に乗んなよ、お嬢ちゃん」

「いててて……　このエリート気取りのバカ女がぁ！」
動けない少女の視界を、ボロいスニーカーのつま先が埋め尽くす。次の瞬間にはサッカーボールの如く頭部を蹴られていた。衝撃のあまり、自分が何をされたのか理解できず呆然とする。
口の中に広がった血の味でようやく事態を呑み込み、今度こそ頭の中が恐怖一色に染まった。
「おいおい、俺の手まで蹴るつもりかよ？」
「いいじゃねぇか。ちゃんと離したくせによぉ」
「あ、あんたたち！　女の子の顔を蹴るなんて最低よ！　こんなことしてただで済むと思ってるの!?」
手で触って自分の顔がどうなってしまったのか確かめたかった。しかし、身動き取れず強がるのが精一杯。でないと泣き出しそうだ。
こんなところで泣きたくなかった。だから己を鼓舞するためあらん限りの罵声を浴びせる。
「最低！　クズ！　どうせ顔も見せられないほどブサイクなんでしょ！　夜なのにダッサいサングラスなんかしちゃってさ！」
サングラス男は特に反論もせず、頭を掻いて口元を歪ませている。
しばらく沈黙が訪れて次に口を開いた時には声のトーンを落としていた。
「おい、沼田。こいつを立たせろよ」
「……程々にしとけ」
少女の背に乗っていたのが沼田という名前の男だと分かったところで状況は何も変わらない。
両手首を掴まれて無理やり立たされ、ようやく沼田が尋常ならざる巨漢だと思い知った。

まるで磔にかけられたかのように少女の足が浮いている。
「おー、おー……　鼻がひん曲がっちまったけど、かわいい顔してんじゃん？　身体もなかなか」
制服の裾を捲られ、腹の辺りを弄られる。
あまりの不快感に悲鳴を上げようとしたが、サングラス男は少女の顎を掴んで口の中に雑巾を捩じ込んできた。汚水と泥を混ぜた味が広がり、いよいよ涙を零してしまう。
「んぐっ……　んん……」
「魔物騒ぎに便乗してさぁ、ちょ～っと小遣い稼ぎしようとしただけなのになぁ。素直に金渡して一発ヤらせてくれるだけで見逃してやろうと思ったのに」
「んん！　んんん!!」
「あーあ、何言ってんのかワカンねぇ……んだよっ!!」
サングラス男の拳が少女の鳩尾に突き刺さる。抉るように内臓を持ち上げられて胃液が逆流したが、口に栓をされているせいで逃げ場がなかった。
食道を迫り上がってくる異物感と乱れる呼吸が少女の意識をかき乱していく。
「エリート面のバカ女が！　いい気になってんじゃねぇぞ？　あ？　聞いてんのか!?」
頬を張られ、また腹を殴られ、文字通りサンドバックにされた。少女はもう頭の中が真っ白で考えることすらできない。
瞼（まぶた）にパンチが当たって視界が塞がり、逆流した吐瀉物が喉を焼いた。
「おい、その辺にしておけ」
少女の両腕を拘束している沼田は呆れた声を上げるが、サングラス男の怒りは収まらない。

しまいには少女の太ももの間から黄金色の液体が垂れて湯気を上げた。もう顔は原型をとどめていないほど腫れ上がって、腹の辺りは青黒く変色している。
「沼田、こいつを下ろせ」
「まだやるつもりなのか？」
「うるせぇ。クチでチンカス掃除させた後でブチ込むんだよ。ヒィヒィよがらせてやらなきゃ気がすまねぇんだ」
「こんなボコボコの顔の女相手によく勃つモンだな」
「穴がありゃなんでもいいんだよ！」
沼田は逆らう気がないらしく、あっさり手を緩めた。
落下した勢いで少女は前のめりに倒れ、口に詰められた布を吐き出す。口蓋からは血と胃液が混じった汚物が溢れた。
「汚ねぇっ!!　やっぱヤメだ！　こんなのにフェラされても気持ちいいはずねぇし！」
「ズラかるぞ」
「ま、待て！　ちょっと下のクチの具合を確かめるからさぁ」
殴られ続けた少女はとうに気絶していて、抵抗ができなかった。
スカートと下着を脱がされ、サングラス男の肉棒で純潔を散らしたそのときでさえ声ひとつ出ない。
まるで人形を犯しているみたいだとサングラス男は嗤い、濡れていない秘部を詰ってから膣内に射精する。その間、少女はなんら反応しない。

「もう気が済んだろ」
「あぁ。でも処女のクセにとんでもなくユルユルだったぜ？」
「気絶して股に力が入ってないからだ。強い締め付けがお望みなら殴る前に犯すべきだったな」
「なぁ、沼田ぁ。お前ってもしかしてアタマいいのか？」
「お前よりはな」
「へへっ、違いねぇ」
サングラス男は去り際、少女の頭をグリグリと踏んで蹴り飛ばし、その上に小便をかけてから陰茎を仕舞った。
直後、少女はイビキのようなうるさい呼吸を始めたのだが二人は気付かないまま去っていく。
暴行を受けた哀れな少女が救急搬送されたのは数時間後のこと。魔物騒ぎで公園に人が寄り付かなかったことで発見が遅れたのだ。
医師の処置も虚しく、脳に何度も衝撃を受けた彼女が目を覚ますことは二度となかった。

4

「なぁ、聞いたか。昨日の夜、商業エリアでさ……」
「聞いた聞いた。魔物が出たんだろ？」
「ひでぇよな。うちの女子生徒が被害に遭ったって」

「ボコボコにされてレイプされらしいぜ……」
「レ、レイプってどんな感じで？」
「知らねぇよ。性的暴行を受けたってハナシだぜ」
「頭を何度も殴られたせいで昏睡状態なんだってさ」
朝の通学路を横並びで歩く男子生徒たちが他人事のように噂を口にしている。女子生徒はそれに嫌悪の視線を向けているのだが彼らは気付いた様子がない。
見兼ねた月島魅麗は彼らの前に出て注意する。
「そういう話は往来でするものではないでしょ？」
「え？　えっと、あなたは……」
「国際科Ａクラス担任の月島魅麗。そういうキミたちは何科の生徒？」
「あ、俺たちは……　その、ごめんなさい！」
蜘蛛の子を散らすように男子生徒たちは各々の学舎に駆け込んでいく。
魅麗は心配そうな視線を向けてくる女子生徒たちにも声をかけた。「大丈夫」だとか「早く自分の教室に行きなさい」とか、その程度のことしか言えない。
やはり噂のせいで不安を感じているらしい。
魅麗……つまりは国際教導学園に教師と潜入しているナヴァルニィは一際大きなため息を吐く。
（一体、どうなっているのかしらねぇ？）
昨晩の下魔は全て倒され、ナヴァルニィ自身もそれなりにダメージを喰らって撤退している。

今日は痛みを我慢して仕事に来た。
国際科の建物に入るとそれだけで不穏な空気を肌で感じる。どこもかしこも昨晩の暴行事件の話題で持ち切りだった。
ナヴァルニィは教員室に入り、コーヒーメーカーをセットしてからパソコンでメールをチェックする。ホームルーム後に緊急の職員会議があるそうだ。例の暴行事件のことだろう。
(下魔をけしかけてからスイートリップは即応しているし、女の子を襲うような暇は無かったと思うけど……)
後で部下のバジリスクに確認せねばなるまい。
ナヴァルニィの預かり知らぬところで勝手に下魔を動かし、暴走させた可能性がある。
「ホームルームだけはちゃんとやっておかないとねぇ」
鏡で身だしなみをチェックしてから担当している国際科Aクラスに向かう。
教室内はやはり重苦しい空気で、生徒たちは月島魅麗の姿を見るなり何か言いたそうな雰囲気を醸し出した。
事件のことを聞きたくて仕方ないのだろう。
「みなさん、おはようございます」
ナヴァルニィはゆっくりと教室内に視線を巡らせる。
クラス委員を務める七瀬凛々子だけはいつも通り落ち着いた様子だった。さすがは魔法戦士……と誉めてやりたいところだが、今はお互いに昼の顔である。
出欠の確認をとり、生徒たちには手短に連絡事項を伝えておく。

それから敢えて明言はせず付け加えた。
「昨晩のことは耳に入っています。みなさんが不安に思う気持ちも理解できます。しかし、憶測ばかりの不確かな情報を触れ回ることは避けて下さい。以上」
あからさまな落胆と不満の視線を受けながら、ナヴァルニィは教室を去る。
そんな背中を追いかけてきた人物が一人だけいた。
「月島先生」
振り返ると、七瀬凛々子が立っている。
胸のあたりに手を当て、先ほどとは打って変わって厳しい表情をしていた。
（もしかして正体バレちゃったかしらぁ？　認識阻害はかけておいたんだけど～）
ドキドキしながら振り返って「何かしら？」と平静を装う。
俯いた凛々子は口を紡いだままだ。
「廊下で話し難いことなら、私の部屋に行きましょう」
「……はい」
促してやると、静かに後をついてくる。
職員会議が控えているのだがナヴァルニィにとっては敵の動向の方が重要だった。
教員室に入り、凛々子には応接用のソファに座ってもらう。
「コーヒーでいいかしら？」
「いえ、お構いなく……」
「飲みなさい。気持ちを落ち着けた方がいいわ。七瀬さん、思い詰めた顔してるもの」

「……」
カップを差し出しても手を付けず、黙り込んだままだった。
ナヴァルニィは一口だけコーヒーを飲んだ後で凛々子が喋り出すのを待つ。
「ごめんなさい、月島先生は授業があるのに……」
「あなたも授業を受けないといけないでしょ。話したいことがあって、気持ちの整理がつかないのならば昼休みにまた来てもいいわよ」
「……昨日の夜、国際科の女子生徒が魔物に襲われたのは知っていますか？」
「えぇ、もちろん」
「どんなことがあったか詳しく教えてもらえませんか？」
「意外ね。七瀬さんにそんな野次馬根性があるなんて」
「そうじゃありません。被害に遭った子が……前にAクラスにいたこともあって……」
国際教導学園は二カ月ごとの試験で成績順にクラス分けがされる。Aクラスはトップ集団ということだ。
エリート揃いで競争が激しく、大半の生徒は上がったり下がってりするのが普通だと聞いている。
その中でも七瀬凛々子は一度もBクラス落ちをしたことがない。
「元クラスメイトだから心配というわけね。ごめんなさい、野次馬根性なんて言ってしまったわ」
「いえ……」
「私も綱紀局の委員を引き継いだばかりで信じたくなかったの。けど、本当に魔物が出るのね。

七瀬さんが言ってた正義の味方ってのは何をしていたのかしら？」
「……」
　既にスイートリップの正体を知っている。当て擦ってやると凛々子は唇を噛み締めて泣きそうな顔になった。
　同級生を犠牲にしてしまったことを相当に悔やんでいるらしい。
「残念だけど、大した情報は持っていないの。これから職員会議があるからその場で共有することになるでしょうね」
「私は……」
「こんなことになってしまって大変でしょう。でもね、こういう時こそ教師を頼って。七瀬さんがちゃんと勉強できるようにサポートするから」
　テーブルを挟んで身を乗り出し、凛々子の手を握ってやる。指先からは僅かな怯えが伝わってきたが、やがて力が緩んだ。
「ありがとうございます、月島先生。私、急に愛梨先生がいなくなって落ち込んでしまって……」
（その愛梨先生は私のアジトで化物相手にアンアン喘いでいるんだけど）
　にこりと笑ってみせると、凛々子も応えて笑った。
　少しは信頼を得られただろう。カウンセリングとでも称して話を聞いてやれば、スイートナイツの動向も把握しやすくなる。
「もう大丈夫？　それなら授業に出ないとね」
「はい」

5

「おかえりなさい、アネさん！」
「おかえりじゃないわよぉ～　バジちゃんに聞きたいことがあるのよねぇ」
教師の顔を終えてアジトに戻るなり、サンショウウオ頭の怪物がナヴァルニィを迎え入れる。召喚器によって呼び出された上魔のバジリスクだ。ヌメヌメとした薄茶色の表皮は嫌悪感を誘うものの、つぶらな瞳だけに限れば愛らしくもある。
質量転送装置（トランスファ）を使って一瞬で自慢の左右非対称コスに着替えたナヴァルニィが玉座に腰掛ける。するとバジリスクは赤いカーペットの上で恭しく傅（うやうや）く。
「で、あっしに聞きたいことって何です？」
「昨日の夜の作戦のことよぉ。バジちゃんに下魔の指揮を任せたわよねぇ？」
「へぇ。そうですね。指揮と言っても、アネさんは『合図するから公園のあたりで適当に暴れといてねぇ♡』しか言いませんでしたけど……」
「女の子をボコボコに犯した下魔ってどいつなの～？」
「え？　なんですそれ？」
「とぼけちゃダメよぉ」
「そうは言ってもアネさん、呼んだ下魔は全部瞬殺されましたけど……　そんなことしてる暇な

かったと思いますよ」
「じゃあ、バジちゃんがやったのぉ？」
「まさか！　あっしは隠れて様子を見ていただけです！　魔法戦士とヤるには心の準備というものが……」
　なんでこの上魔は妙に小心者なのだろうか。
　魔界から呼ばれた割に頼りにならない。
　ナヴァルニィは軍帽の鍔を指で持ち上げ、赤い瞳を細めて疑わしそうに睨む。
「信じてもいいのねぇ？」
「もちろんですとも！　あっし、アネさんが魔力ゼロの無能者だからって主従関係を破ったりしませんって！」
「素直なんだか愚直なんだか……」
「だってアネさん、魔法じゃなくて変な技使うじゃないですか」
「否（ニェット）。変な技じゃなくて質量転送装置（トランスファー）よ～」
　判断は保留しておく。仮にナヴァルニィが十全の状態であれば全質量降臨させて魔界ごとぶっ壊せそうなものだが、そんな自慢話をしたところで流されるだけだ。
　実際、スイートリップに敗走してボロボロで帰ってきたところを見られている。
（思い出すと結構ハラ立つわぁ。コスチュームは馬鹿にされるし、電撃でビリビリされて喉やられるし～）
　顎で合図してバジリスクに飲み物を持って来させた。

キンキンに冷えた缶チューハイが差し出されると、プルトップを開けて一気飲みする。人工的な甘さがナヴァルニィの思考を明瞭にした。
（ま、淡々と自分の計画を遂行するまでだけどねぇ）
二本目の缶チューハイを開けてちびちび飲みながらアジトの中を回る。
今日は残りの時間で召喚器の定期チェックと個人的な実験をするつもりだ。
窓付きの大きな窯が鎮座する部屋に入り、あちこちに繋いでおいた測量機器のデータをノートパソコンに吸い上げる。
「こっちの世界の電子機器が、私のいたトコと大差ないのだけが救いねぇ。じゃないと魔法だの魔力だの未知の原理過ぎて解析すらままならなかったわぁ」
地下にある召喚器は正常に動作して微々たる量ながらマナを蓄積していた。
空気からでもマナは取り入れられるが、人間をすり潰して絞りカスにしたほうが貯まるのは早い。いずれは全面的にその手段に移行するつもりだ。
「人体のマナ化って面倒なのよねぇ。召喚器の近くじゃないとできないし～　そもそも私の目的に必要なマナの推定量が数万人分だからいけないんだけど～」
ブツブツ言いながらキーボードを叩き、アイデアをメモしていく。狙うは省力化だ。実はマナ化のプロセスは概ね解析できている。
スイートルージュには黙っているが、既に何人もの人間をすり潰してマナを搾り取り、データを集めていた。
「私の洗脳技術と併用すれば自分で自分をすり潰すできそうねぇ……　都市規模での実行には、

召喚器をもっと高い場所に設置しないといけないけどぉ」
計画はうまく行きそうだが、別のことが引っかかる。
預かり知らぬところで起きた犯罪が気持ち悪い。
悪役たるもの、自分で悪事の糸を引いていないと気が済まないのだ。
「……女子生徒を暴行したやつのことも調べてみましょうかねぇ」
我ながら面倒くさい。
そう自嘲したナヴァルニィは予定を切り替え、夜の街に向かった。

6

「やあっ！」
「グエッ⁉」
スイートリップの放つ裂帛の気合いと共に、クレッセント・ハーケンが下魔の腹を捉える。
人型の爬虫類は断末魔と共に魔界へ送還され、後にはチリひとつ残らない。
「次っ！」
腰の大きなリボンをはためかせ、黒基調のコスチュームに身を包んだスイートリップが夜の街を駆ける。
ジャンプする度に短いスカートが捲れ、薄桃色の下着が露わになったが気にも留めない。

意識を集中して魔物の気配を探っていく。絶対に討ち漏らすものかという決意が滲み出ていた。
（もう被害者は出さない！）
女子生徒のレイプ被害から一週間が経っている。
あの日、スイートリップは見事にナヴァルニィを撃退した。
だが撤収した後に事件が起こったのである。
自分の油断が未来ある生徒を奈落へと落としてしまったのだ。
被害に遭った女子生徒は頭を強打して意識が戻っていない。このままずっと戻らない可能性が高いと、綱紀局の責任者である月島先生が話していた。
事件を受けて全生徒は夜間外出を控えるように指導されている。
（こんなとき、愛梨先生がいてくれれば……）
スイートナイツのリーダーであるスイートルージュ。
経験豊富な彼女なら敵の意図を看破できるだろう。
だが未だ行方知れずのままだった。
（でも、生きているはず。愛梨先生は何があっても乗り切れるだけの実力を備えている。今は信じて待つ！）
弱音を吐くよりも手を動かすべきだ。警戒を緩めずビルの谷間を跳躍していく。
あんな事件の後だというのに普段と変わらず賑わっていた。ちらほらと学生服も見える。
（ちゃんと先生の言うこと守ってくれればいいのに……）
学生の気持ちは理解できても、自分の身の安全を優先してほしくて少しだけ苛立ってしまう。

下魔を遊撃していたスイートリップは、ビルの上に降りて息をついた。どうやら今日の分はあらかた片付いたらしい。
「こんばんは～♡」
安堵した刹那、背後から呑気な声がした。
振り返ると銀髪に軍帽の女が立っていた。燃えるような赤い瞳を気怠げにこちらへ向け、片手にはアルコールと思しき缶を持っている。
「ナヴァルニィ！」
クレッセント・ハーケンの切っ先を突き付けてやると、ナヴァルニィは両手を上げて降参のポーズをとる。
「今日はあなたと戦いに来たわけじゃないわぁ♡」
「魔物を放(はな)っておいて、今更何を！」
「理由があるのよ～　濡れ衣を着せられたままってのも癪じゃない～？」
「濡れ衣？」
スイートリップが眉を顰めると、ナヴァルニィは両手を上げたまま立ち上がる。
「生徒に大怪我させたレイプ犯のことよぉ♡」
「あれは魔物の仕業……」
「否(ニェット)。リップちゃんは知らないかも知れないけど、一昨日の夜も似たような事件が発生しているのよぉ」
「えっ？」

「そのときの被害者は表沙汰になるのを嫌って警察に届け出なかったわぁ」
そんなことが!?
驚きを隠せずにいるとナヴァルニィは「付いてきて♡」とビルから飛び降りる。慌てて後を追うと駅から離れた路地裏に辿り着いた。両脇にビルが聳える細い道で、弱い灯りがかろうじて地面を照らしている。
物陰から様子を伺うナヴァルニィの背後に立ち、スイートリップは隙なく構えた。
「セコい罠なんて仕掛けないから安心してねぇ」
「信用できません」
「う〜ん、悪党という自覚はあるけど信用してもらえないのは悲しいわねぇ……」
「一体、何がしたいんですか？」
「ここって繁華街から駅までのショートカットになってるのねぇ♡　だから学生がよく通るの〜」
「まさか、魔物を配置したんですか!?」
「否（ニェット）。魔物騒ぎに便乗した輩が状況を利用しているだけねぇ。ほらぁ〜」
黒艶のグローブで指差した先から、国際教導学園の女子生徒が走ってくる。どうやら魔物騒ぎに追い立てられて駅へ向かっているらしい。
しかし、行く手を阻むように路地の隙間から巨漢が現れた。ナヴァルニィとリップの位置からでは男の表情は窺い知れないものの、不穏な空気をこれでもかと醸している。
あからさまに怯えた様子の女子生徒は踵を返したが、今度は逃げようとした方向からサングラスをかけた男が現れた。最初に姿を見せた男には劣るものの、そいつも十分いガタイがよく筋肉

質である。
「彼らがレイプ魔ってワケ♡　魔物騒ぎに便乗して女の子を襲い、金目のものを奪っていたのよぉ」
楽しげなナヴァルニィに腹が立ちながらも、スイートリップの顔からは血の気が引く。
最初に襲われた女子生徒は大怪我を負わされて意識が戻っていない。そんなひどいことをするのは魔物だとばかり思っていた。
「ま、ゼーロウを舐め腐ってくれた報いは受けてもらいましょう♡　首と胴体を切り離されたらさすがに女の子を襲うなんてできないもんねぇ♡」
「そんなことさせません！」
「声が大きいわぁ。気付かれちゃうわよ～？　それにあいつら生粋のクズでしょ～？　死んだって構わないんじゃないのぉ？」
「悪ことをしたなら道を正せばいいだけです」
「無理だと思うけどなぁ……　それともリップちゃんなら彼らを正せるのぉ？」
「心を込めて説得すれば……きっと分かってくれます」
「本気ぃ？　別にいいけど、あんまりモタモタしてるとレイプが始まっちゃうわよぉ」
「!?」
巨漢があっという間に女子生徒の口を塞ぎ、逃げられないように羽交締めにしていた。サングラス男の方はカバンの中身を漁っている。その手際の良さから初犯でないことは明らかだった。
スイートリップはナヴァルニィを物陰に置いたまま飛び出す。

「待ちなさい！」
闖入者に対して男二人は怪訝な視線を向け、それが女の子だと分かるや否やまとわりつくような嫌らしい笑みを浮かべた。
「なんだぁ、お前は？　妙なカッコしやがって。コスプレ風俗のオネーちゃんか？」
サングラス男が女子生徒の鞄を投げ捨てて前へ出る。
奪った財布を自分のズボンのポケットに捩じ込み、睨みつけてきた。スイートリップは動じず毅然とした態度で言い放つ。
「その子を離して」
「いきなり出てきて何言ってんだオマエ？　イカレてるのはカッコだけじゃねぇな」
戦士の衣を侮辱され、歯噛みしていると男たちの背後にナヴァルニィが音もなく路地に降り立つのが見えた。
スイートリップに注目が集まっているせいで彼らは気付いていない。
急激に緊張感が高まるも、ナヴァルニィは左手の人差し指を唇に当ててウィンクする。
そして右手の指先で宙をなぞり始めた。指先からは赤い糸が出て空中に文字を描く。
『リップちゃんが抵抗したら、彼らを殺す』
「!?」
声に詰まっていると糸は解けて次の文章が紡がれた。
『心とやらを込めて道を正してあげなさい。できるものならね』
「なんだ？　急に固まりやがって。後ろに何かあるのか？」

サングラス男が背後を振り返るよりも一瞬早く、ナヴァルニィはジャンプしてビルの屋上へ飛び移ってしまった。
悍ましいレイプ魔は、自分達がそれよりも遥かに恐ろしい存在に人質とされたことを知る由も無い。
(私が逆らったら、この人たちがひどい目に遭う……)
いくらスイートリップでもこの場の全員を同時に守りながら逃すのは難しい。彼らが大人しく言うことに従う見込みはなく、勝手に動かれたらナヴァルニィの餌食になるだろう。
「その子を離してください。お願いです」
「お? 急に下手に出やがったな」
「あなたたちが他の女子生徒にも暴力を振るった犯人だということは知っているの。大人しく警察に出頭して」
途端に場の空気が変わった。
男二人は顔を見合わせ、互いに頷いている。
「沼田。そっちの女は縛って転がしておけ。口はしっかり塞いでおけよ」
「……分かった」
「こっちの変態コスプレちゃんは、ちょっとばかし世の中の仕組みを分からせてやらないとなぁ」
無遠慮に近づいてきたサングラス男はリップの顎を持ち上げる。ナヴァルニィに言われた通り、抵抗しない。
156センチのスイートリップとでは頭ひとつ半も身長差があった。しかし、生身の人間の腕

力では魔法戦士にまず敵わない。捻り上げるくらいは本来であれば余裕だった。
「かわいい顔してんじゃねぇか。随分と華奢だが脚は長くてきれいなモンだなぁ」
「離してください……」
「それにしても見慣れねぇカッコだ。なんのアニメのコスプレだ？」
「これはコスプレじゃありません」
「ふ～ん、そうかそうか。じゃあ、普段からパンツ丸見えのミニスカートにヘソ出してんのか」
「ち、違います!!」
「おい、やるならサッサとやれ。誰か通るかもしれん」
背後で女子生徒を縛り上げた巨漢が注意を促す。サングラス男の方は「黙ってろよ、いいところなんだから」と吐き捨てた。
「沼田よぉ、お前はロマンが足らねぇんだよ」
「……時間をかけ過ぎだと言っているんだ。ここは建物の中じゃないんだぞ。それに今日は金を奪うだけじゃなかったのか？」
「ったく、分かったよ。俺より賢い沼田様の言う通りだな。つっても、のんびりチンポ突っ込んでいるヒマも無さそうだ」
「あなたたち！　どうして女の子相手にこんな卑怯な真似ができるんですか！」
「ははっ、卑怯だとさ。面白いこと言うネエちゃんだな」
「力の弱い者に乱暴して恥ずかしくないの!?」
サングラス男は面倒臭そうに舌打ちし、スイートリップの顎から手を離して代わりに喉元に掴

みかかる。僅かに力が込められると息が苦しくなった。しかし、この状態からでも振り解くことはできる。ナヴァルニィさえいなければの話だが。
「威勢のいいネエちゃん、とりあえずカネ出せや。本当はあんたと仲良しになりてぇところなんだが連れがうるさくてな」
「卑怯者に渡すお金なんてありません！　早く離して！」
あくまで気丈に、強い視線を向けるスイートリップ。
全く服従しようとしない態度はサングラス男の逆鱗に触れる。これまで、どんな女でも腕力と肉棒で黙らせてきた稚拙なプライドにヒビを入れられたのだ。
「いい加減黙れよ、バカが！　状況分かってねぇだろ!!」
首を掴まれたスイートリップは壁に押し付けられた。
サングラス男の丸太のように太い右腕が振りかぶられるのを見て、スイートリップは咄嗟に腹筋に力を込める。
引き締まったお腹にゴツゴツした拳がめり込むと、風圧でコスチュームの上着が捲れて乳首が露わになる。それでも恥じらいを感じる暇はなかった。
「っがはッ……!?」
胃が潰れ、横隔膜ごと肺が持ち上げられるほどの衝撃が背中を突き抜ける。
コンクリートの壁面はリップの身体がめり込んで放射状のヒビが入った。
（息が……吸えない!?）
苦しくて喘ぐも、胸の辺りが痺れて呼吸ができない。酸素が遮断された脳は一気に判断力を失っ

ていく。
「うはっ!?　俺ってすっげえぇパンチ力じゃね!?」
殴った当人は歓喜の声を上げていた。左手はリップの首を掴んだまま離していない。
（なにこれ……人間の……力じゃない？）
弛緩した口元から涎が垂れ、胸元のリボンが汚れた。
慌てて両手でサングラス男の手を剥がしにかかるも、びくともしない。
いくら屈強とはいえただの人間のパンチで魔法戦士がこんなにダメージを喰らうなんて有り得なかった。
「すげぇすげぇ！　すげぇ気持ちいいいいっ!!」
二発、三発とサングラス男の拳がリップに腹部にめり込み、その度に身体が「くの字」に折れる。
胃の内容物が食道を迫り上がってきて、吐き気を堪えるので精一杯だった。ずしんと重い痛みが骨の芯まで届き、十発目のパンチを腹部に喰らったところで手脚が脱力してしまう。
ビルの壁面からは剥離したコンクリート片がパラパラと落ち、白い煙を巻き上げている。
「お、おい。グッタリしてるぞ。やり過ぎだ」
「あぁん？　黙れよ、沼田。最高に気分いいぜ。どうなってるんだこりゃ!?」
「お前、クスリでもやってんのか……」
「そんなチンケなモンじゃねぇよ！　殴ってるだけなのに射精しそうだぜ！」
（こ、この人……　無自覚にマナを力に換えている……）
薄れゆく意識の中で、スイートリップはサングラス男の怪力の正体を察する。だからといって、

抵抗してしまうとナヴァルニィは躊躇なく彼を殺すだろう。
悪行を正すどころか油断して悪党にやりたい放題にされてしまった。ついには堪えきれずに嘔吐する。汚物は男の腕にかかった。
「うわっ、吐きやがった!?　汚ねぇな！　何してくれんだよ!!」
毒づいたサングラス男はリップの身体を地面に叩きつけ、仰向けに倒れたところで背中を踏みつけてきた。靴裏の硬い感触が背骨を潰し、リップはさらなる苦悶に喘ぐ。
「そのくらいにしておけ！　誰か来るぞ！」
「俺が殴り合いで負けるわけねぇだろ」
「鉄砲持った警官相手でもか？」
「ちっ、悪趣味な露出コスプレ女め。次に俺たちの邪魔したらタダじゃおかねぇからな!!」
吐き捨てた男たちは路地裏の奥へと消えてしまった。
スイートリップは力の入らないまま変身が解除されて七瀬凛々子の姿に戻る。消化器系が潰れるほどの痛みは変身解除によって幾分か治ったものの、すぐには動けそうになかった。
「確か、こっちの方から大きな音が……」
ハイヒールが地面を踏み締める音が耳に届き、凛々子はピクリと反応した。
瞼を開けると女性の脚が目に入る。
「あなた……　七瀬さん!?」
悲鳴をあげたその人は地面に膝を突いて、凛々子の身体を抱き起こした。
ぼんやりとした視界には見覚えのある人物がいる。

「月島……先生？」
先週、国際科Ａクラスの担任になったばかりの月島魅麗だった。
スーツ姿で綱紀局と書かれた腕章をしている。他にも同じ腕章をした人間が後から現れた。
「ひどい怪我！　早く、救急車を！」
「先生、どうして……ここに？」
「注意したのに夜間に出歩く生徒が多いから、綱紀局で見回りしていたのよ。まさか七瀬さんがいるなんて」
涙目になった魅麗にギュッと抱き締められ、凛々子は唇を噛む。
口蓋に残った酸味が惨めだった。
途方もない無力感に苛まれていると遠くから救急車のサイレンが聞こえた。
逃げ出したくなったが、魅麗の腕を解くことはできなかった。

7

尖った拳が迫ってくる。
お腹の筋肉を裂いて内臓を押し潰してくる。
息を吸えない。胃液が逆流する。地面に倒れて嘔吐しているとありったけの嘲りが聞こえてきた。

みんなが自分を嗤っている。なにが正義の味方だ、と。
耳を塞いでも声は直接脳に届き、立ち上がって逃げ出してもどこまでも追ってきた。
暗闇に向かって走る、走る、走る……
やがて意識は光に包まれていった。そこで夢は終わる。
「……また同じ夢」
七瀬凛々子は自室のベッドの上で目を覚ました。
パジャマをめくってお腹の辺りを確認する。未だ痛むものの痣は既に消えていた。
月島先生に助けられ、病院に連れて行かれて治療を受けたが骨や脳に異常はなかった。
スイートリップに変身していたため、どれも致命打にはならなかったのである。
しかし、変身解除後も腹部にはクッキリと拳の跡が痣となって残り、見るたびに背筋が寒くなった。
もし、あの暴漢たちがまた女子生徒を襲ったら……最悪の事態が思い浮かぶ。
(絶対に止めなくちゃいけない。いけないのに……)
肉体的なショックよりも、むしろ精神的なショックの方が大きい。
魔物の仕業だと思っていたレイプ事件が人間の手で起こされていたこと。
その人間たちを正すことができず取り逃がしてしまったこと。
そして凛々子自身も被害に遭ったこと……
学校を休んで成績を落とすわけにもいかず、翌日の午後には授業に戻ったが月島先生には怒られてしまった。

あなたはもっと休んでいなさい、と。
「生徒想いのいい先生だけど……」
この場合はありがた迷惑だなと苦笑する。
顔を洗い、制服に着替えて身形を整えた凛々子は軽めの朝食を摂ってから寮を出た。
外にはスーツ姿の美女が待っている。
「おはようございます、月島先生」
「おはよう。体調は大丈夫？」
「はい。もう平気です」
「……まだ無理をしているように見えるけど」
担任の月島魅麗はあの日以来、朝から凛々子の様子を伺いに来るようになった。
家が近いらしく、そんなに手間にならないとは本人の弁である。
「月島先生こそ、私にばかり構っていていいんですか？」
「いいのよ。怖い目に遭った生徒をケアするのは当然だもの。それにコミュニケーションって大事よ。私の前任だった沙倉先生と七瀬さんはとても仲が良かったって聞いているわ」
「そうですけど、愛梨先生は厳しかったです」
「あら？　じゃあ私も厳しくしたほうがいいかしら？」
並んで歩く月島先生は意地悪そうに微笑んだ。本当にしごくつもりなんてなさそうだから、凛々子もつられて笑う。
「はい。ビシビシしごいてくださいね」

「ふふふ、七瀬さんって良い子ね。きっとご両親の育て方が良かったんでしょうね」
親のことを褒められて、凛々子は思わず顔が綻ぶ。
周囲はまだ住宅エリアなので生徒の数は少ない。立ち聞きされる心配はないと思って、とっておきの話題を切り出した。凛々子の心根を作る話でもある。
「私の凛々子という名前、リリは凛々しいと書くんです」
「一度聞けば忘れない珍しい名前ね」
「はい。両親からもらいました。この名前に相応しく、正しく綺麗な心を持っていたいと願っています。悪いことをする人を正していける強い心の持ち主になれたらいいな……なんて」
ふと、あの夜のことがフラッシュバックした。
ナヴァルニィが赤い糸で空中に描いた文字……
『心とやらを込めて道を正してあげなさい。できるものならね』
あの嘲りを跳ね返すことはできていない。レイプ魔の二人組は凛々子の言うことに耳を貸さなかった。
(私はまだ、強く正しい心を持っていないのかな……)
不安になって俯いてしまうと、月島先生は心配顔で覗き込んでくる。
「どうしたの、七瀬さん?」
「い、いえ! なんでもないです!」
「そう? まだ浮かない顔をしているけど」
「なんだか自分が情けなくて。私に暴力を振るった男の人を正そうとしたんです。ぜも全然ダメ

で……」
「怖い目に遭っても毅然と立ち向かったのね。立派だわ」
「結果は惨めでした」
「そんなことない。私は信じているわ。七瀬さんはきっと名前の通り、強い心の持ち主になれるって」
月島先生の励ましを受けると、温かい光を浴びたように感じた。
暗く沈んでいた気持ちが再び浮かび上がってくる。
(そうよ。こんなことで挫けちゃいけない)
スイートナイツは愛と平和を守る正義の魔法戦士だ。
クイーン・グロリアから授かった力で、この街を脅かす悪と戦わなければならない。
もっともっと強くなって、ゼーロウの魔手からこの学園都市を守りたい。
それだけじゃない。
悪い人がいたなら、その人を正していきたい。
以前から変わらぬ決意と願いは、凛々子の胸に強い炎を取り戻してくれた。
「……ありがとうございます、先生。救われました」
「うん。さっきよりもいい顔してる」
「そうでしょうか?」
「凛々しい顔。名前の通りね」
月島先生の言葉に、凛々子は思わず笑顔が溢れた。

体験版はここまでです。
続きは製品版にてお楽しみください。